『英語教育』６月号　(2015)．大修館

【投稿】学習指導要領に即した大学入試問題作成を求む

―大学入試改善のための提案（平成27年版）―

大阪府高等学校英語教育研究会研究部会有志

1 はじめに

私ども大阪府高等学校英語教育研究会研究部会では、様々な高校現場で一人一人の生徒の将来を展望し、4 技能統合型指導とその評価のあり方を中心に、より良い英語授業のあり方を模索してきています。本稿では、2020(平成 32)年度の「大学入学希望者学力評価テスト」での 4 技能型入試改革を待たずして、2016(平成 28)年度入学生徒、すなわち、新課程の生徒対象の入試が大きく変わらなければならないことを取り上げます。特に、国公立大学個別試験がコミュニケーション志向型と和文英訳・英作文偏重の翻訳型に二極化していることを問題視し、英語教育の質的転換に貢献したいと思います。

2 知識基盤社会にふさわしい学習指導要領

21 世紀の「知識基盤社会」では、知識や技能を「習得」し，様々な場面で「活用」できることが大事です。単なる知識だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求や新たな課題に対応することができる「コンピテンシー（能力）」という考えが世界の教育現場で注目されています。この考えを核として、小中高等学校の学習指導要領が改訂されています。しかし、この「コンピテンシー」が各教科の目標と内容からは読み取りが難しくなっています。特に高校では、この新しい能力観に基づいて、「授業は英語で行うことを基本」とし、教員と生徒が英語を使う場面を増やし、英語授業が 4 技能型であるべきとなっていますが、この理解が浸透しているとは言い難いようです。そのため、文部科学省は 2013(平成 25)年「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表し、小学校での教科化、中学で「英語で授業」を行うことと、高校では、発表、討論、ディベートなどを行うことを例示しました。21 世紀型の社会で求められる資質・能力という観点からは、活動の高度化を提案し、次の学習指導要領の改訂でも、生涯にわたって 4 技能を積極的に使えることを柱として考えるのは当然のことです。今が、21 世紀型に対応する英語教育への転換の最高の機会であることを入試改革と合わせて考える必要があります。

3 高等学校で目指す4技能型授業

本研究部会では、この世界的な教育に関わる意識変革の中で、4 技能統合指導を大事にし、学習指導要領に合った授業を支援し、その指導法を共有する活動を進めてきています。コミュニケーション志向の活動で、しかも、評価と一体となった指導が展開され、生徒が「英語を使う」力を付けてきている例が部会で紹介されています。具体的には、「コミュニケーション英語」で、異なるタスクを与え読解やリスニングを繰り返し行うラウンド制指導、ICT を使ったオーラルインタラクション、発問の工夫で内容を深める英問英答、対訳シートを使った音読練習、自分の意見を付加したサマリーやリテリングを行う活動が広がってきています。

4 変化する大学・高校英語教育

全国的には、2014(平成 26)年度にスーパーグローバル大学（SGU）とスーパーグローバルハイスクール（SGH）が始まりました。

SGU では、世界レベルのトップ大学や、先導的試行に挑戦し国際化を牽引する大学として、国際化と大学改革を進めています。外国人教員も増え、教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れたアクティブ・ラーニング型授業が行われ、入試にも外部試験を取り入れるなどの改善を予定しています。新テストの創設を待たずに、各大学にアドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）の一体的な策定を義務付けるとともに、大学が 7 年に 1 度受ける認証評価の評価項目にも「入

学者選抜」を明記するとしています。つまり各大学は、社会に送り出す卒業生像や、そのために大学で行う教育の姿も具体的に想定しながら、入学者選抜の方法を工夫しなければいけなくなるわけです。

5 学習指導要領に則した授業を活かす大学入試

ところが、入試が旧来の文法訳読に偏重したものであり続けるようでは、21 世紀型能力を目指す指導要領とかけ離れた入試となります。平成 25 年、26 年度の新課程での指導を後退させるのは勿論、これからの 4 技能を重視した指導に悪影響を与えます。現行の「大学入学者選抜実施要項」には、「学力検査は、高等学校学習指導要領に準拠し、高等学校教育の正常な発展の障害とならないよう十分留意して実施するものとする」と明記されています。

この部会が考える国公立大学個別試験モデルのひとつは次のものです。

1. 知的な英文を読んで、その要旨、意図を英語でまとめ、それについて、自分の意見を分かりやすい英語で論理的に書く
2. 採点は、内容・言語・語彙などを規準とし、ある規準にそって段階分けすルーブリック[注1]を明確にし、そのルーブリックに基づくものとする

さらに、読解（外国語理解の能力）に関しては、国立教育政策研究所教育課程研究センターが、次の 7 点を学習指導要領に基づく評価基準に盛り込むべき事項として挙げています[注2]。これらを参考にテスティングポイントを設定した作問がのぞましいと考えております。

1. 語句や表現、文法事項などの知識を活用して内容を的確に読む
2. 説明などを読んで，特に重要な事実等を捉えることを通じ，全体の要旨を理解する
3. 物語などを読んで，登場人物の言動やその言動の理由等を捉えることを通じ，概概要や要点を理解する
4. つながりを示す語やフレーズに注意して文章を読み，論理がどのように展開しているかを把握する
5. 文章の内容から，書き手の意図を推測する
6. 説明などを読んで，事実と意見などを区別して内容を理解する
7. 読んだ内容についての賛否や簡単な感想を述べることができるように，批判的に読む

6 21世紀型能力を示唆すべき大学入試

既に 21 世紀型能力を視座に入れて、複数技能統合型やコミュニケーション志向型の入試が実施されています。かなりの長文の理解を学習指導要領で求められる観点から試し、正しく引用もさせ、その内容について受験者の意見を英語で書かせるリーディング・ライティング統合型や、リスニングとライティングを統合した出題をする大学もあり、その見識と努力を高く評価いたします。

平成 27 年度入学生対象の入試は旧課程で学習を行ってきた生徒が対象でした。その入試にも、改善の兆しが見えています。後置修飾や倒置などの構文解析を中心とした和訳と日本的な発想で書かれ、一貫性の乏しい内容の和文を英作させる問題を出題し続けていた大学で、変化が見られました。その大学では、平成 27 年度アドミッション・ポリシーに、「外国語運用能力を含むコミュニケーションに関する力」を明記し、その力を試す入試へと改善を行いました。具体的には、読解では、1) キーワードの内容を説明させる、2) 代名詞の指す内容を明らかにして和訳させる、3) 穴埋め問題が出題されました。英作では、自然な流れの 2 名の対話を和訳するものと、論旨展開の明白な和文が素材となり、コミュニケーションを意識するものとなりました。岩盤で動かないとの予想もあったなかで、一年先取りで変化が見られたことは喜ばしいことです。さらに平成 28 年度入試には抜本的な改善を期待したいものです。

7 翻訳型入試の欠点

とは言え、全国的にはまだまだ、下線部和訳や英作の出題が多い傾向が見られます。多くは言語用法の知識を見る問題であり、「言語使用」の問題とはなっておらず、21 世紀型のコンピテンシーを測る作問と比べると見劣りします。もちろん基礎的な反復学習も大事ですが、新課程では、学んだ知識技能をどう使うかが大事です。そして、これを授業で真剣に模索してきている教員が増えています。そして、高校現場では、英語を英語のまま処理する力や、自分で考えた意見を英語で表現する力が 1、2 年次で育ってきています。

構造分析と語彙知識偏重の問題なら、従来の語彙・構文を知識として覚える指導で点数が取れますが、「合格できても使えない英語」という今までの堂々巡りが続きます。翻訳型入試問題なら、「和訳する練習」や「語彙と構文の暗記」を徹底しなければならないというねじれ現象を招きます。そして、入試が変わらなければ、3 年次には 4 技能を統合してさらに伸ばそうというところで、翻訳の学習をしなければなりません。また、従来の文法訳読を、「教え易い」という短絡的考えで行っている場合も少なからずあり、和訳、英作偏重入試は、そのような実践に口実を与えてしまい、せっかくの、現場改善の芽を摘んでしまいます。

8 新課程大学入試に期待する

英語教育の在り方に関する有識者会議議事録等をみましても、「入試改革」を望む声は大きいものがあります。従来の入試から変更を行うのは、新たな労力を伴い、大きな決断が必要です。しかし、翻訳型試験でよしとされていた時代では、英語の役割は「入試に通りさえすれば」よく、日本の中でのみ留まっていました。今や、英語は世界共通語として、欧米だけなく、世界のあらゆる国との対話に重要な役割を果たすために不可欠な道具であることの認識をあらたにしなければなりません。

今、小中高大を貫き、21 世紀の「知識基盤社会」で身につけるべき英語力の育成に取り組んでいます。大学では、マッピングや図表に基づく発表活動などで英語を使用するアクティブ・ラーニング型授業が広がっていると聞きます。高校では、学習指導要領の方針で授業を行い、国立教育政策研究所教育課程研究センターが示すような観点での評価と一体化した、英語を使う授業が広がっています。この 2 つの流れにはこれまで述べた 21 世紀型のコンピテンシーの観点が組み込まれています。この観点で感がると、翻訳型入試で使用された同じ英文素材を使ってコミュニカティブな作問が可能です。例えば、概要を表にまとめたものを穴埋めで完成させ、それについての自分の意見を表明させます。これならば、翻訳によらないで理解が確認でき、考える力も試せます。新課程での高校の授業展開にも合致していますし、高校生にも大学でのアクティブ・ラーニングの姿がはっきりと見えるようになります。入試作成に関わる方には、ぜひ、この観点から、新課程での学習に相応しい入試形式への変更を行っていただきたいものです。

今後の動向を注視して、現場教員の立場から、粘り強く提案をし続けていきたいと思います。

注

1 Educational Testing Service (2004).
IBT/Next Generation TOEFL
Integrated Writing Rubrics
https://www.ets.org/Media/Tests/TOEFL/pdf/Writing_Rubrics.pdf

2 国立教育政策研究所 (2012). 評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 外国語） ～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の 学習の確実な定着に向けて～ 第２編 外国語科における評価規準の作成、評価方法等の工夫改善 第１章 教科目標，評価の観点及びその趣旨
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/11_kou_gaikokugo.pdf

（文責）大阪府立学校指導教諭
大阪府立鳳高等学校　溝畑